

2022年横浜ナザレン教会・降誕後第一主日(命名祭)礼拝(1/1)

「インマヌエルの主」

マタイによる福音書第一章 20 節から 23 節・テモテへの手紙Ⅱ 1:7

【聖書】

マタイによる福音書 1:20 このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。21 マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」22 このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。23「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

テモテへの手紙Ⅱ 1:7 神は、おくびょうの霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊をわたしたちにくださったのです。

1 命名祭

今日の週報には、命名祭礼拝とあります。飼い葉おけの中に人となられた神の独り子が、律法に従って、割礼を受けイエスと名づけられたのが、誕生の八日後であった、とルカ福音書に伝えられているからです。聖書の時代の日数の数え方は、その当日も含めるので、十二月二十五日当日も含めての八日後は、一月一日となります。主の命名を記念して、一月一日の礼拝を命名祭と呼ぶようです。

産まれた男の子に割礼を施し名前が付ける、というのは、信仰共同体イスラエルの一員に加える、と言う意味があります。現代で言えば、幼児洗礼が一番近いかもしれません。神は、その独り子を神の民、信仰共同体イスラエルの一員とさせ、「真の人」としてこの地上を歩ませ始めます。今日は、命名祭礼拝にちなみ、主の名前に込められた神の御心がどのように私達の間で実現していくのか、聖書に耳を傾けたい、と思います。

その為、今日の礼拝の聖書として、主のお名前「イエス」の意味が明かされているマタイ福音書第一章20節から23節を選びました。マリアの婚約者であり、ダビデ王の子孫であるナザレ村の大工、ヨセフに対して、天使が語った言葉です。ヨセフは、婚約者のマリアが自分の子ではない子どもを宿していると知り、苦しみ、葛藤し、彼女との婚約をひそかに破棄しようと決心します。ですが夢の中でヨセフに現れた天使は、「マリアの胎内の子は聖霊によって宿った子である」と告げ、次のように命じます。「マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」

神がご自身の独り子に定められた名は、「イエス」でした。「イエス」はギリシャ語での名前であり、ヘブライ語では「ヨシュア」となります。旧約聖書には、モーセの後継者として登場する「ヨシュア」が有名です。ヘブライ語名「ヨシュア」ギリシャ語名「イエス」には、「神ヤハウエ

は我等の救い」という意味があり、当時のユダヤ人の間ではとても一般的な名前でした。新約聖書にも神の独り子以外に「イエス」という名の人物は何人か出て来ます。当時は数えきれないほどたくさんいた「イエス」という名を持つユダヤ人。ですが、その名の通り「神は我らの救い」「神の民を罪から救う」という出来事が現実となったのは、ただおひとかた、乙女マリヤに宿りベツレヘムの飼葉おけの中に生まれた方だけでした。

それは四つの福音書が語っている通りに実現しました。神と等しい方が、その在り方を変えて人間となり、私たち人類を代表し、人間の神に対する背きの罪を十字架で贖ってくださいました。神は、このお方を義であると認め、三日目に甦らせ、全人類に先立ち永遠の命を与えられました。そうして、主イエス・キリストは、被造物である私達の前に、神の子としての命、永遠の命へと通じる道を拓かれたのです。

しかし、そこを歩む者が一人もいなければ、道を拓いた意味はなく、救いにもなりません。主キリストは、私たち人間を、ご自身が拓いた救いの道へと導き歩かせてくださる方です。預言者イザヤの言葉を引用して語られている通りです。「このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。『見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』この名は、『神は我々と共におられる』という意味である。」「神は我々と共におられる」インマヌエルの主として、私たちと共にいてくださることで私たちを救いの道に導き歩かせてくださる、と天使は告げています。

しかし、先ほど私たちは使徒信条で信仰告白したように、主イエスは「天に昇り、全能の父なる御神の右に座し給えり」と信じてきました。主は、2000年前、父なるみ神の御許に帰って行かれて、この地上には既におられないのです。どうして主イエスはインマヌエルの主であることができるのでしょうか。

「聖霊」というお方を通して、主イエス・キリストは私たちと共に生きてくださる、と聖書は答えます。聖霊は、見えないみ神であり、イエス・キリストを「我が主、我が神」と告白し洗礼を受けた者の内に住んでくださる、と教会は信じて来ました。

人はどんなに親しい相手であっても、その相手と全ての時を共に生きる事はできません。パートナーであろうとも親子であろうとも親友、恋人であろうとも、人は自分しか入れぬ部屋を心の内に持っています。しかし、聖霊なる御神は、私たちが誰にも見せたくないと思う、私たちの底の底、暗い所まで分け入ってくださいます、そして、キリストの光で私達の内を照らし出し、私達と共に生きるインマヌエルの主となってくださる、と聖書は語ります。

それは真実でしょうか。孤独に耐えられない人間達の「ぜひともそうであってほしい」という願望が造り出した幻想に過ぎないのでしょうか。いえ、決してそうではありません。インマヌエルの主、聖霊は幻想ではありません。神の現実です。二千年間の教会の歩みの中には、聖霊を通じてインマヌエルの主キリストと共に生きた数えきれない程の信仰の先輩がいます。彼らがインマヌエルの主の証人です。横浜ナザレン教会にもいます。私は横浜教会に赴任してから五年9カ月で、教会員のご葬儀を七回ほど司式しましたが、毎回、一人一人の人生に聖霊という形で共にいてくださったインマヌエルの主を見出す恵みに与ります。

2 臆病の霊

では、インマヌエルの主、聖霊とはどのようなお方なのでしょうか。パウロは、愛弟子テモテへの手紙の中で、聖霊について次のように語っています。「神は、おくびょうの霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊をわたしたちにくださったのです。」

最初の「臆病の霊ではない」とはどういう意味でしょうか。かつて、ガリラヤ湖を舟で渡っていた主イエスと弟子の一行は嵐に遭遇します。弟子達は恐れ惑い、眠っている主イエスを起こして言います。「先生、わたしたちが溺れても構わないのですか」。主は風と湖を叱り嵐をおさめてから弟子達に言います。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」(マルコ7:40)。この「怖がる」と「臆病の霊」の「臆病」は同じ言葉です。つまり、「臆病」とは、不信仰のこと。人は試練にあい神を見失った時、動揺し混乱します。嵐の中の弟子達のように。事態を冷静に考えることができず不安になり臆病になり、しない方が良い言動をとること、度々です。私も経験ありますし、皆さんも経験があるのではないのでしょうか。

ですが、私たちの内に住んでくださる聖霊なる御神は、試練の中にあっても、父なる御神と主イエス・キリストを信じる信仰を私達に与えてくださるお方、力を与えて神に対して祈り叫ぶことをさせてくださる、試練の中にも平安を与え、感謝と賛美の言葉を私達の唇に置いてくださる方とパウロは語っているようです。

3 力と愛の霊

そして続けて、「力と愛の霊と思慮分別の霊」とパウロは語ります。「力」と訳されているギリシャ語は、聖書では「神の力」として用いられる事が多い言葉です。マリアに対して天使ガブリエルが「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。」と語りました。有名な受胎告知の場面です。この「いと高き方の力」の「力」も同じ単語が使われています。ですから、「力と愛と思慮分別の霊」の「力」とは、無から有を生み出す神の力、十字架に死んだ主イエスを甦らせた力、全く新しい命を生み出す神の力、と言えます。聖霊は、全く新しい命を生み出す力をお持ちの御神、そのような大きな力を持つ方が、私たちの内に既に来てくださっています。

しかし、どのように新しい命を生み出してくさるのでしょうか。「力と愛の霊」の「愛」は、完全なる愛、神の愛を示す“アガペイ”という言葉が使われています。完全なる愛、神の愛とは、何か？十字架のイエス・キリストに輝いていたもの、「父よ、彼らを御赦してください。何をしているのか知らないのです」とご自身を殺す敵をも愛する愛、どんなに深く強い人の憎しみや無関心の闇であっても、貫き通して輝く光と言えるでしょう。このような愛は私たち人間の内にはありません。聖霊なる御神とは、私たちの内にはない、神の愛を私達の内に全く新たに生みだしてくさる方と言ってよいと思います。先ほど、今朝の礼拝の交読文、ボーレン

先生の祈りの詩の中で、次のように告白した通りなのです。「あなた聖き霊は、我らを強め、愛する力をくださる。我らが愛せないその処(ところ)でも。」

神の愛こそ、命を生み出す神の力ですが、それは私たち人間の内にはありません。私たちの内にはないからこそ、聖霊が働いてくださいます。そうして私達の内には「神の愛」を生み出し、私達を憎しみや無関心の闇から解き放ってください、とパウロは語っているのではないのでしょうか。このような神の愛をその内に与えられるという事が、神の子の命、新しい命を生きる、という事ではないか、と思います。

4 思慮分別の霊

それにしても、聖霊なる御神は、私たち人間の内に住んでくださるほどに小さくなられました。主イエス・キリストよりも更に小さくなられ、低くなられた、とも言えます。そして、主と同じように私達を操り人形のようにはなさいません。私達を一個の存在として受け止め、私たちの自由意思を尊重されます。ですから、聖霊なる御神の導きに従って、その力のもとに生きるか、それとも聖霊を無視し、自分の欲望や思いに任せた道を生きるか、私たちに委ねられています。

私たちに委ねられているからこそ、私たちは、何が神の想いであるかを判断せねばなりません。しかし、私達が神の御心を知ることは難しい。私たちの誰一人として神を見たことはない、神について知らないからです。自分の思いや考えを神の御心に違いない、と勘違いする事もしばしばです。

主の一番弟子ペトロもそうでした。ご自身の十字架の死を弟子達に予告する主イエスに対し、ペトロは主を脇にお連れしていきめます。「そんな事があつてはなりません」。「エルサレムで死刑になる」という主イエスの言葉は、「この方こそ待ち望んだ神からのメシア、救い主だ」と主イエスを信じ、何もかも捨てて従ったペトロ達にとってはあつてはならない事、彼らの期待を裏切ることでしたから。しかし、主はペトロを厳しく叱責して仰います。「サタン、引き下がれ。あなたは神の事を思わず、人間の事を思っている。」この「引き下がれ」は、「私の前を行くな。私の後ろに回れ」という意味があります。

私たちは、このペトロと同じように、自分の思いを神のみ旨だと勘違いする者だと言う事を忘れてはなりません。私達は、自分は一ミリもかわろうとせず、自分の理想とする所に、自分の考えに神を引っ張り込もうとしがちな者達です。「インマヌエルの主だから、キリストは私についてきてくれる」と都合よく考える。しかし、勿論、神は私たちの後ろをついて歩かれる方ではありません。インマヌエルの主、とは、私たちが父なる御神を求め、主イエス・キリストに従って生きようと祈り願う時に起こることなのです。

そして、私たちは主のみ旨を知らない、だからこそ、思慮分別の神なる聖霊が必要なのです。聖霊は「何が主の想いであり何が主の想いでないかを教えてください」と神に祈り求め、神の御心を思いめぐらし、神のみ旨かそうでないかを、見分ける力を私達に与えてくだ

さる方です。

ですが、聖霊なる神の御力はそれだけではありません。御心を思慮分別する祈りや力だけでなく、その御心に従って生きるのに必要なものも与えてくださいます。「思慮分別」と訳されるギリシャ語には、「節度をもって行動する」という意味もあります。ある神学者は、「節度をもって行動する」事には鍛錬が必要という意味から、「思慮分別の霊」を「鍛錬の霊」と訳しました。この「鍛錬の霊」という訳は、聖霊なる御神の在り方の核心をついているのではないかと私は思います。

聖霊なる御神は、私たちが神との対話に生きること、主イエスに従って生きることを求めておられますが、ありのままの私たちには、その力はありません。だからと言って「私たちにはその力がないから仕方ない」と諦めてしまってもいいのでしょうか。いえ、諦めなくていい、鍛錬し身に着けることができる、その為に、イエス・キリストは十字架の上で、私たちにその身をささげてくださいましたし、父なる御神は、主を甦らせてくださった、聖霊なる御神は私たちの内に下り住んでくださったのです。インマヌエルの主と共に生きるという事は、神の御心に添って生きることができるよう、鍛錬すること、聖霊なる御神は、その訓練のコーチである、と言ってよいと思います。訓練は試練を通して行われることが多いようです。私たちが生きていると出会う様々な苦しみや困難を通して、私たちは聖霊なる御神により支えられ導かれ、鍛えられていくのです。このようなインマヌエルの主、聖霊の導きに従って生きることを、「信仰」と呼んでもよいのではないのでしょうか。

5 しなやかな信仰に生きる

ですから、ある登山好きな神学者は、「信仰」をスポーツに譬えました。信仰には、スポーツと同じように鍛錬が必要だ、というのです。スポーツの鍛錬は、臨機応変に動くしなやかな筋肉を造り上げます。いえ、スポーツだけではなく、聖霊に従って生きること、つまり信仰を楽器の演奏や歌を歌うことに譬えることもできるでしょう。演奏や歌唱で何度も繰り返して練習をし訓練することで、私たちはより自由に臨機応変に演奏することができる「しなやかさ」を得ることができます。料理が好きで楽しむ人は、料理に、園芸が好きな人には園芸に譬えることもできるでしょう。何事も楽しむまで習熟するには、ある程度苦しい訓練、しかし習熟する喜びの方が大きい訓練が必要となります。そうして訓練、鍛錬を重ねていくことで、色々な局面にも適切に対応でき、すぐには諦めない、又、ぽっきりと折れることもない、しなやかさが身に着くのだと思います。聖霊の導きに従って生きることを訓練すればするほど、人は状況に左右されず、しなやかに柔軟に自由な信仰に生きることができるようになるのではないのでしょうか。

では、聖霊のもとに生きる訓練とは何か。礼拝の最後に歌う讃美歌21 91番「神の恵み豊かに受け」の歌詞にあるように、神を求めて祈り願うこと、感謝し賛美すること、聖書のみことばに聴くこと。つまり、神を礼拝することから始まる生活ではないか、と思います。聖霊なる

御神の導きのもと、日々の生活の中で、神を礼拝し、インマヌエルの主イエスの教えに生きる鍛錬を続ける時、私たちの内に、聖霊によって生きる、よりしなやかな命、新しい命が与えられ、私たちは変えられ続けます。日々新たにされます。そこにこそ、新しい希望が生まれます。

今日から始まる2023年、聖霊による鍛錬を受け、主の証人としてのしなやかな命を新しく生きることができますように、信仰の友と共に、励まし合い祈り合い、歩んで行くことができますように、この幸いなる命を生きる人が少しでも多く起こされますように、心より祈り願います。